2　浜中津橋

はまなかつばし

わが国最初の鉄道用鉄桁として、明治７年（1874）開通の大阪－神戸間に使用されたトラス橋の残党が、道路橋に改造されて今なお大阪市内で使用されている。その元の桁の製作は明治６年（1873）と考えられているので、大阪市内には、別掲の緑地西橋（旧心斎橋、No.1）とともに、鉄道に端を発するものと、元々の道路橋が、それぞれ現存する最古の橋として揃ったことになる。

この橋の名は浜中津橋というが、その発見はアマチュアの鉄道研究家、亀井一男・倉島鋏一の両氏に負う所が多い。

先に述べた大阪－神戸間のトラスは、橋長70ftのもので、武庫川の12連をはじめとして、合計39連が架設された。最終的には複線用として使えるように設計され、したがって３列あるトラスのうち、中央の位置にくるものは、両側のものより荷重を余計に分担するので、部材が太くなっている。しかし当初は単線用として開通させたので、両側用の一つと中央用と２列のトラスのみで構成した。材質は錬鉄で、イギリスからの輸入品である。

形態的には端柱が垂直なのが特徴で、これが浜中津橋発見へのヒントの一つとなったものである。これらは明治29年（1896）に複線化されたが、新しく追加された部分も最初の設計思想を生かすべく、すでに鋼の時代に入っていたが、特に錬鉄を使用した。

この端柱の特徴から、前記両氏は阪急電車を取りあげた出版物の中の、阪急自身の長柄運河橋梁の写真の背景に、この鉄道橋からの転用橋らしいものを見つけ、念のために大阪市に問い合わせたところ、それらしい橋があることがわかり、その位置近くを踏査されたところ、現存していることがわかったのである。

その間の経緯は、大阪市の資料などから、次のようなものであることが解明された。

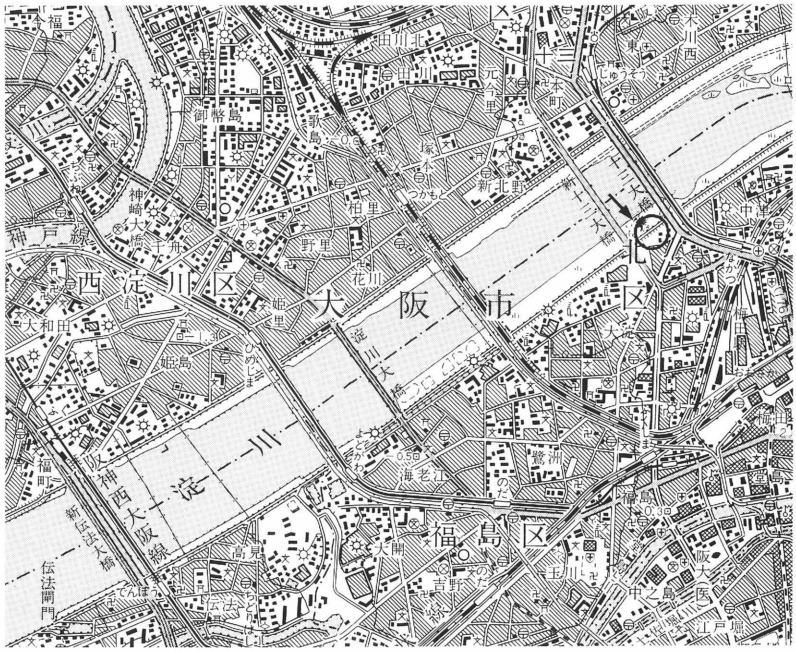
まず下十三川橋梁の９連（主構数27）は、新淀川の開削により明治33年（1900）頃撤去され、明治42年（1909）開通の道路の長柄橋へ11連（主構数22、新淀川部10連・長柄運河部１連）、十三橋の長柄運河部へ１連（主構数２）が転用された。この後者の１連が先の写真のバックに写っていたのであるが、これは十三橋の架け替えにともなって昭和10年（1935）、すぐ近くの付け替え道路に再転用された。これが現在の浜中津橋である。

この際、長さが不足したため、継ぎ足し延長をおこなったほか若干の補強をおこなっているが、全体の形態は大きくは損なわれておらず、またトラス間隔は、鉄道の単線時代より171㎜広いだけなので、その雰囲気はよく伝えられている。

また２本の主構は、３種類ある元の鉄道橋の中央用、当初の側部用、追加の側部用のいずれかという点は、実測の結果、下流側のものは明らかに太く中央用、また上流側のものは、横桁を載せた跡などから、追加の側部用のものと、それぞれ判断された。　〔ＮＹ〕

竣工年月：昭和10年（1935）
所在地：大阪府大阪市北区
河川名：長柄運河（現在湛水なし）
橋長・幅員：22.434ｍ×4.500ｍ
径間数・支間長：１×22.75ｍ
形　式：２主構ポニーワーレントラス（ピン結合、鉄道時代単線、後に３主構複線）

〈1987年1月，撮影・西野保行〉



（1:25,000　大阪西北部）